

9 体 育 科

今村昌禎・島本 靖

1 研究テーマについて

(1) 「自立に向かう子どもたち」の姿 <3つの『り』>

- ① **運動へのこだわり** (=自主的な問題解決能力) = 自分の体を見つめ、受け身ではなく、運動にこだわりをもって(没頭して)取り組み、主体的に課題を追究している姿。
- ② **仲間とのかかわり** (=豊かな人間性) = 仲間の演技や動きに励ましやアドバイスを送ったり、仲間との話し合いの中で、問題や課題を解決したりして、共に運動自体を楽しみ、高まり合おうとしている姿。
- ③ **生活への広が** (=たくましく生きるための健康や運動) = 自分の体を見つめ、学習した事柄を生活スポーツとして、ふだんの暮らしの中に、積極的に生かしている姿。

(2) サブテーマ「人やものとかかわることを大切に」のとらえ

サブテーマには、人やものにかかわることによって…

- ① 問いや気づきが生まれ、意欲が高まる。
- ② 自分だけでは気づかないことに目を向けたり、自分の考えを深めたり、修正したりしながら、主体的に運動する態度や問題解決能力を身につけていく。
- ③ 身につけた力が集団の中で生かされ認められることで、子どもは自己の存在に自信をもち、自分らしさをもっと追究していく。

ということが含まれている。そこで、体育科の学習において、3つの「かかわり」を大切に学習に取り組んでいく必要があると考えた。

- ① **運動とのかかわり**
 - ◇ 子どもの実態を十分にふまえた年間カリキュラムづくり・教材選び
 - ◇ 運動の特性を味わせる出会わせ方・課題設定・活動時間の保障
- ② **仲間・教師とのかかわり**
 - ◇ 一人一人がみんな違うという認め合いから出発し、共に楽しむために体験を通して学習を創り上げる。
 - ◇ 誰もが自由に意見が言い合え、出された意見をみんなが受け入れ、共に活動するやわらかな雰囲気づくり。(教え合い、励まし合い、認め合い、思いやり)
- ③ **自分自身とのかかわり**
 - ◇ 運動するときの心(=動きの感情)を大切にする。「自分の体との対話」
 - ◇ 自分らしさを見つめ、表現できる場や時間の保障。
 - ◇ 運動と自分、仲間と自分を見つめ続けるふりかえり。

2 基本的な考え方について

体育は、運動の特性を味わう上で、人間関係が大きく左右する教科である。グループやチームの人間関係によって、運動の特性に関係なく、好きになったり、嫌いになったりもする。つまり、肯定的にとらえると、運動を通して、より望ましい人間関係を築き上げることのできる教科であるといえる。

また、生涯に渡って、運動・スポーツにかかわり、より豊かで健康的な生活を築いていくための基礎を培うという社会的役割を担っている教科でもある。それを自負して教科学習にあたりたい。

(1) 運動・スポーツを通して豊かな人間性を育む

競争スポーツが生活文化として確立するには、優劣の秩序化や相手を打ち負かすところに意味が置かれるのではなく、勝者も敗者も、強者も弱者も互いに認め合い、しかも、それぞれのよいところや個性を存分に発揮し、高め合うことの意味や価値をみんなに共有されることが必要であると考え。「人を思いやる気持ち」「互いを認め合う気持ち」を根底にした自己実現の在り方を追究していきたい。

(2) 運動の学び方(=生活に結びついた「使える」問題解決力)の習得を図る

生涯体育・スポーツの実践力は、子どもが主体的に運動に取り組むなかで育まれると考える。子どもがこだわりをもって運動に取り組み、実感を伴って納得するという過程が重視されるべきであろう。また、学び方を習得していくことは、学んだことを生活に生かそうとする力として、必要ではないかと考える。

3 授業づくりにおけるポイント

(1) 子どもの願い・欲求を満たす「運動との出会わせ方」

- ◇ 運動自体の心地よさを味わう場を大切にす。
- ◇ 子どもの実態を把握し、子どもの願い・欲求を満たすという側面を大切にしながら、教師が教えたこと・気づかせたい価値に結びつけて、授業の方向づけを図る。
- ◇ 学習意欲の継続や学習の見通しをもつために、目標の明確化を図る。

(2) 自分なりに発展しやすい「学習課題の設定」

- ◇ 具体的な手だてが見つかる、達成の可能性のある自分なりの学習課題をつくれるように導く。(授業前・授業中)
- ◇ 自分の運動(学習課題)がどうだったか一つ一つ記録させ、次のやりたい運動(学習課題)が見つけれられるようにする。

(3) 自己決定できる「場」や課題解決のための「活動時間の保障」

- ◇ 自分にとって、何が、どれが効果的なのか、自分の体で試して納得する授業過程を設定する。
- ◇ ある程度運動のしくみやゲームの方法が分かったら、自分なりに考えた方法(運動づくり・ルールづくり)を試す場や課題解決のための時間を保障する。

(4) 学び合い、高まり合う「集団づくり」

- ◇ 学習材に応じたグループを組織したり、チームを編成したりする。
- ◇ 個の違いやよさを認め合い、互いに思いやれるやわらかな雰囲気づくりに努める。

(5) 個人内の伸び、集団内のかかわりをみとる「評価」

- ◇ 「できばえ」に対する評価を「自己実現」という視点から行い、昨日の自分より今日の自分というように、個人の中での向上に喜びを感じることができるよう働きかけを行う。
- ◇ 集団(グループやチーム)内のかかわりが、喜びや成果としてみとれる評価を工夫する。

4 成果と課題 —「人やものとかかわることを大切に」から— (◇=成果, ◆=課題)

(1) 運動とのかかわり

- ◇ その一時間の授業で、子どもたちが何を学ばなければならないかを明確にして授業づくりをしていくことが、基礎となる動きや技術、戦術などの確かな習得につながっている。
- ◇ 自分の体や体力についての学習をした上で、運動に取り組んでいくと、運動をしていく必要性や楽しさを感じながら意欲的に活動していた。運動と健康の一体化にも結びつけられる学習に一步近づくことができた。
- ◆ 年間カリキュラムにおける弾力的な運動の取り上げ方について、実証的な検討をしていかなければならない。
- ◆ 学習内容のつながりを明らかにしながら、確実に子どもたちの力がついていくように、年間カリキュラムの中での題材の系統性や重点的な扱いを検討していく必要がある。

(2) 仲間・教師とのかかわり

- ◇ 能力の違う子どもが共に学び合うことの重要性が共通に確認できた。こうしたかかわりによって、運動に関する知識・技能の習得もより確かなものになるとともに、子どもたちが仲間とのかかわり方そのものも学ぶことができる。
- ◇ 「自分たちの体との対話」を通して身につく体の変化や動きを見つめる目が、仲間の運動技術やかかわり方のよさを見極めるものにも結びついていった。
- ◆ 共に学び合い・高まり合うための教え合い・励まし合い・認め合いの中身をより具体的に明らかにする必要がある。

(3) 自分自身とのかかわり

- ◇ 運動を行うこと、また授業それ自体が非常に主観的なものであることが確認できた。特に運動のコツは主観的であり、技術との関係において考えられなければならない。
- ◇ 「自分たちの体との対話」つまり、自分や仲間の体の変化や動きをじっくりと見つめる習慣をつけていくと、運動自体を楽しむことができるようになる。運動技術を習得するポイントやコツを見つけ出す力も身につくことが明らかになってきた。
- ◆ 運動の心地よさや仲間との一体感という主観的な領域と、運動文化に関する知識・技能の学習という客観的な領域とを統一していくことが、今日の授業の中心的な課題になるものと思われる。この課題を十分に意識しながら、授業研究を進めていきたい。
- ◆ 子どもの実態に応じた「自分たちの体との対話」のしかたやその成果について、授業研究を進めていきたい。

(4) その他

- ◆ 「健康、生命」を基本的なテーマにそえて、保健学習のねらいや内容をしっかりと検討し、子どもたちが運動と健康を一体化として考え、生活していくようにする必要がある。